

「松下アジアスカラシップ」詳細

| 助成番号 | 研究テーマ（留学目的） | | |
|--------|------------------------------|-----------|------|
| | 留学国 | 留学機関 | 留学期間 |
| | 氏名 | 所属 | 区分 |
| 01-010 | 民族誌映画の製作によるインドネシア伝統武術シラットの研究 | | |
| | インドネシア | 国立アングラス大学 | |
| | 村尾 静二 | 総合研究大学院大学 | 院生博士 |

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

問題の所在

アジアの社会や文化を題材にした映像作品は、これまでも多く撮影されてきた。しかしその多くは、撮影する側と撮影される側というきわめて固定した関係のなかで、撮影者がアジアの人々を一方向的に映しだすものであった。また、そのようにして撮られた映像は、そのまま撮影者の国へ持ち帰られるのが常であった。よって、アジアの人々の意見が、作品の内容に反映されることは少なく、自分たちが映しだされた映像を実際に見る機会をもつことも、きわめてまれであった。そして、一般の視聴者は、このような映像を見るなかで、アジアに関するイメージを形成してきた。いま、映像の新しいあり方が強く求められている。

本研究の目的は、国際交流に果たす映像の役割を強く意識するなかで、撮影する側と撮影される側の一方的な関係を解体・再編成することにある。現地の人々とともに撮影をすすめ、ともに映像を視聴し、検討をかさねるなかで、多角的な視点から対象を見据えた民族誌映画を制作する。それは、アジアを、新しいかたちで映しだし、視聴者はそこからアジアの深層を学ぶことができる。さまざまな文化的背景をもつ人々が、言語を越え、多くの情報をわかちあい、それは新たな交流を生みだす基盤となる。そして、これこそ新世紀の、新しい映像のあり方であると考えている。

研究目的

本研究の目的は2つある。

(1)インドネシアには、シラットと呼ばれる伝統武術が遍在し、いまなお多くの人々が、精神鍛錬、健康維持、護身の方策など様々な目的のもと、その実践に従事している。本研究は、修士課程で実施したジャワ島におけるシラット調査の研究蓄積をもとに、シラット文化の発祥地といわれる、スマトラ島西部のミナンカバウ地方において映像をもちいた人類学調査をおこなう。そして、この文化的身振りがかれらの身体にいかに入り込み、身体感覚、自己の認識、宗教的経験を統合しているのかを、現地の住民、実演者、研究者とともに民族誌映画（デジタルビデオ）を制作するなかで究明する。この分析を通して、インドネシア・ミナンカバウ文化圏における身体観の文化的位相を解明する。

(2)シラットの実践を通して身体に内在化され、言語化が困難な身体的知識を、映像の記録・表象能力を応用することにより丹念に拾いあげ、異文化を分析する申請者の主観的な視線と、自文化を再評価するミナンカバウ人の客観的な視線を併せ持つ、自立した民族誌映画を完成する。

近年、身体の文化的位相に関する人類学的研究は、認知心理学の成果を応用することにより、新たな局面を迎えている。身体的知識を、地域社会との相互行為のなかにとらえ、文字による分析では達成し難い微細な現象に着目することにより、身体を新たな視点からとらえ直す本研究は、ミナンカバウ民族研究はもとより、インドネシアの人類学研究に新たな視点を提供する。

成果報告書

助成番号 01 - 010

氏名 村尾 静二

留学先国名
インドネシア機関名
国立アンダラス大学

1. 研究の目的

今回の留学では、インドネシアに遍在する武術の発祥地といわれ、遍在性および実践者の潜在的な層の厚みにおいて他地域を凌ぐといわれる西スマトラ、ミナンカバウを調査地を選び、農村において伝承される武術シレ（インドネシア語では、シラット、と呼ばれる）を調査対象とした。具体的な技の修得にくわえ、シレの文化的な意味や機能に関心があったために、調査場所にはスラウと呼ばれるミナンカバウ人のイスラーム礼拝所を選んだ。インドネシアは世界最多のイスラーム教徒を擁する多民族国家であり、そのなかでも西スマトラのミナンカバウはイスラームへの信仰心が殊に強いことで知られている。かれらの宗教実践は、主に二つの場において日常的におこなわれている。ひとつはイスラーム教徒の礼拝堂ムスジッド（モスク）であり、もうひとつは、親族を中心に形成されるイスラーム礼拝所スラウである。スラウでは宗教実践をとおしてシレが学ばれ、アダット（土地固有の習慣、慣習法）に関して様々な議論がなされる。スラウとは個人の信仰と社会、伝統文化とイスラームの教義を、宗教実践を基盤として結合する、特別な場として機能している。本研究で試みたのは、技をてがかりとして武術としてのシレの仕組みを把握するとともに、シレという身体文化を、スラウを舞台として展開されている個人・社会・宗教の相互作用のなかに位置づけ、撮影調査を通してその諸相を追求することであった。そして、最終的には、シレの実践をとおして身体に蓄積される、文字による分析が困難な身体的知識を、映像の記録・表象能力を応用するなかで丹念に拾いあげ、異文化を分析する視線（調査者）と自文化を再評価する視線（ミナンカバウ民族）を併せ持つ民族誌映画の制作を試みるなかで、人類学・異文化研究の新しい分析モデルの可能性を考えることである。（映像の編集は現在進行中です。）

2. 参与観察と情報収集

2002年2月、西スマトラ州都パダンに到着後、アディティヤワルマン博物館(Museum Negeri Propinsi Sumatera Barat Adhityawarman)に滞在し、シレに関する文献調査と情報収集。パダン近郊で活動を続ける数々のプルグルアン（道場）を訪れインタビューによる情報収集。国立アンダラス大学、文化人類学教員の協力で、タナ・ダタール県、アガム県、リマプル・コタ県など、ミナンカバウ文化伝承の中心地といわれる内陸高知平野部を訪ね歩き情報収集。2003年春以降、タナ・ダタール県の農村部に滞在し、スラウにて参与観察を重ねる。とくに、滞在期間中に二度経験した断食月（Ramadan）とその後の大祭（Idul Fitri）を含む11～12月は儀礼の多い時期でもあり、スラウで生活をするなかで撮影調査をおこなった。その他、各地で頻繁に開催されるシレの儀礼や伝統芸能に関する様々なフェスティバル、文化会議に積極的に参加した。

その間に収集した文献にはおよそ次のものがある。アディティヤワルマン博物館所蔵のシレに関する写真、論文、調査報告。西スマトラ州政府、文化、教育、宗教担当省によるシレとスラウに関する調査報告。西スマトラ地方紙に掲載されたシレおよびスラウ関連記事。ミナンカバウ文化資料情報センター（Pusat Dokumentasi dan Informasi Kebudayaan Minangkabau）や、ミナンカバウの自然と慣習法に関する会議団体（Lembaga Kerapatan Adat Alam Minangkabau）が所蔵するシレと芸能に関する写真、論文、調査報告。インドネシア・プンチャ・シラット協会西スマトラ支部が所有する写真、活動記録文書。各プルグルアン（道場）のメンバーなかで共有されている、シレの教えに関する文書。地元大学の主に文化人類学、芸術学、文学の各学部に残された、シレに関する卒業論文など。

3. 調査地と研究対象

調査地は、西スマトラ州、タナ・ダタル県、スンガイ・タラブ郡、コト・バル村にある、スラウ・タラン（ひさしを持ったスラウ、という意味）と呼ばれるスラウである。ここではシレ・クマンゴという流派のシレが伝承されていた。ミナンカバウに遍在する多様なシレのなかでもことに有名なこの流派をつくったのは、シェ・アブドゥラフマン・アルカリディ (Syekh Abdurrahman Alkhalidy 1812-1932) である。同郡内にあるクマンゴ村に生まれ育ったシェ（高名なイスラーム導師の呼称）は、幼少よりシレの修行に励んだが、スラウに道場を開いたのはメッカ巡礼を終えた1862年といわれる。スラウではイスラームの教え、神秘主義、そしてシレの修行が積み、高名なシェの教えを求めて同じ村やタナ・ダタル各地から多くの修行者が集まったといわれる。

今回の調査地スラウ・タランにおいてシレ・クマンゴが伝承されているのは、スラウを先導するプヤ（イスラーム導師の呼称）の父親がシェの直弟子であったという経緯による。現在、シレ・クマンゴが生まれたクマンゴ村では、師範の高齢化と子供達のシレに対する価値観の変化から、シレにたずさわるものは少ない。シェが説いたイスラームの教え、神秘主義、薬草医療の知識、そしてシレの知識を最も色濃く継承しているのがスラウ・タランである。

4. シレの目的と効用

シレは、まず、肉体 (lahir) のうえでは護身の役割をはたす。ただ、技の修得はかならずしも仮想敵へと向けられるだけではない。俊敏かつ正確な運動能力を育み、身体の各要所（とくに、手、ひじ、腕のつけね、首、胸、足のつけね、ひざ、足首）をつなぐ関節や筋肉を無理なく使い、身体のバランスと全体的な統一感を磨くなかでみずからの身体に関する理解を深め、けがと修養を繰り返すなかで、身体組織に関する具体的な知識を獲得する。その関連でいえば、シレは健康の維持にも使われる。日々シレの修行を始めるにあたり準備運動がもたれることはない。それは、シレをかたちづくる動きはいずれも日常の動作の延長線上にあるがゆえであり、そのため老齢になってもシレを演じることのできる老人は多い。シレは、広くインドネシアではシラットという呼称で親しまれ、護身 (bela diri) の術といわれ、英語の self defense と近い意味でとらえられることも多い。とくに都市部では、シラットのスポーツ競技化が進んでいる。一方、ミナンカバウでは、身体を護り、健康を維持する (jaga diri) 術という言葉が好んでもちいられることが多い。

シレは使い方次第では危険な道具となり、また、その動きは常に相手との関係性のなかで形成される。よって、シレを学ぶことは同時に道徳倫理を学ぶことでもある。修行においては、護身に先立って攻撃してはならないことが強く説かれ、敵を前に現状を自己反省する厳しい態度が求められる。それは精神と忍耐の修練であり、人間関係の築き方、思慮分別を持つ礼儀正しい態度やしつけ教育の問題とも重なる。また、その道徳倫理観がアダットを基礎として形成されている点や、そもそもシレそのものが慣習村の所有する伝統文化であるという点において、シレを学ぶということは伝統文化を継承することでもある。

道徳倫理の問題は同時に宗教の問題でもある。シレの実践においてはより高次のレベルの問題となるが、内面 (batin) のうえでは、シレの修行は宗教的な感情を深め、厚みを加えるものとして機能し、それはイスラーム神秘主義の教えと緊密なつながりを持つ。また、身体を使うことによりその教えを自己の内に定着させ、深化させる場ともなる。たとえば、シレ・クマンゴの基礎になる動き (langkah tuo) は両腕の動きがアッターを、両足の歩みがムハンマドのアラビア文字をかたちづくる。また、自然のなかでの修行を通し、自然の深層に近づき神秘的力を獲得しようとする試みもなされる。このように、シレは日常生活を構成する多様な側面と関わり合い、そのなかに広く根をおろし、ミナンカバウ文化のひとつの象徴であるスラウに集う人々、そこでなされる諸活動の重要なアクセントとなっている。

5. 方法論的枠組みとしての映像人類学

今回の調査では、スラウにおいて伝承されるシレを、スラウを構成する様々な日常にも配慮して撮影を試みた。その試行錯誤のなかで、映像を通じた文化研究に関する考えも次第に明確になった。今回とくに意識することとなった、映像に潜在的に含まれる特徴とはつぎの三点であった。

5.1 映像による研究対象の実証的な記録と再現

文化とは環境や経済など、周囲をとりまく様々な要素との拮抗のなかで絶えず変化を迫られ、ときには永遠に消滅し、ときには文化政策により新たに創造される。それは絶えず変化を要請されており、本研究対象であるミナンカバウのシレやスラウも例外ではない。映像をとおした文化研究の利点は、現実起こったひと続きの時空間を、映像と音響のふたつの情報をとおして、きわめてありのままに近いかたちで記録し、繰り返し再現することのできるその記録再現能力にある。それは、さまざまな出来事が同時に起きるスラウの生活や、持続する時空間のなかで展開されるシレのような文化事象を分析し、提示するにはきわめて有益であった。

5.2 映像のフィードバックによる調査映像の重層化

映像は視聴者の積極的な解釈行為により多様に解釈され、新たに意味が生みだされる。今回、撮影調査のプロセスのなかに数回の現地試写を組み込んだのは、わたしが研究対象をどのようにとらえるのかという枠組みのなかに、対象となる人々がみずからの文化をどのようにとらえているのかという視点を組み込むためである。それは研究対象を複数の視点からとらえることを意味し、分析に厚みを加えることにもつながった。いま映像編集集中であるが、映像のフィードバック作業は、追加調査の機会を活用して、長期的にこれからも継続していく予定である。

5.3 撮影者の意図を越えた、かくれた次元の記録

映像はカメラの前にある日常を忠実に記録再現するという点ではきわめて客観的な時空間であるが、それが撮影者の意志により厳密に切りとられているという点ではきわめて主観的な時空間である。映像とはこのように主観と客観を両極にもち、そのあいだを膨大な視聴覚情報が往来する扱いの難しいメディアであると痛感した。この特質を前に本研究が着目したのは、撮影調査をとおして映像に何を写し込むのか、と同時に、撮影者の意図を越えてそこに何が写り込んでしまったのか、である。映像は肉眼ではとらえることが困難なあらゆる些細な事柄や、時間と空間のあいだに潜む偶然の動きをも見逃すことはない。そして、現実の表層の奥に潜む文化のかくれた次元の存在を示唆してくれる。調査映像を、ときには現地の人々とともに分析し、文化の痕跡ともいえる微細な情報をひとつひとつ拾いあげ、その内的関連性を明確にしていくなかで、対象に新たな意味を探ろうと試みた。それはいまも映像編集を通して継続中である。

本研究の成果物として現在制作している民族誌映画は、当然であるが、研究対象に関心を持つ不特定の人々が視聴することを前提としている。作品は、視聴者がシレの諸相やスラウの現代的な位相が理解できるように構成するが、そこから視聴者が何を読みとるかにはまた別の力が働く。視聴者は制作者の意図を越え、そこにシレやスラウの何を知り、逆に何を知らることができななかったのか。そして、そこから対象に関して新たにどのようなイメージが形成されるのか。これは本作品にくだされる評価であるとともに、民族誌学や文化表象の問題としても重要な論点を含んでいる。調査地および日本において試写の機会を持ち、そこでの意見や感想を考察するなかで、映像をとおした文化の分析と提示の方法を追求することも本研究が試みた重要なテーマである。